

平成25年度西宮文学案内
春講座 第2回「西宮ミステリーアワー 貴志祐介、清涼院流水…」

日時：2013年6月22日（土）14時
場所：西宮市立中央図書館 集会室
講師：土居 豊（作家・文芸レクチャー）

土居 ここにいらっしゃる皆さんはミステリーがお好きなのかなと勝手に思っているのですが、洋の東西を問わずミステリー小説は読むという方、どれくらい、いらっしゃいますか？やはり半分以上いらっしゃいますね。

お手元のレジメをご覧くださいと、「結末は誰にも話さないでください」とありますが、最初にお断わりをしておきたいと思います。というのは、いろいろ文学のお話をすることが多いんですけど、ミステリーの場合は何が困ると言ってネタバレらしをすると大変な目に遭うので、結末を言わずに作品を解説しなくちゃいけないという、ちょっと無理のあることをすることになります。

結末どころかミステリーの中にはいろんなトリックがありますから、例えばアガサ・クリスティーの『アクロイド殺し』という小説をどう説明していいか分からない。犯人は意外な人物だとは言いようがない。知ってしまうと読む楽しみの半分以上が失われるような気がするので、読んだことのない人に『アクロイド殺し』の魅力を説明するのは非常に苦労するわけですが、今回の場合、皆さんが読んだことがあるかないかは、だいぶ差があるような気がしています。

貴志祐介さんの作品を読んだことがある方はいらっしゃいますか？
三分の一ぐらいですね。

では、二人目の作家の名前が読める方は？

清涼院流水（せいりょういん りゅうすい）さんの小説を読まれたことがある方は…これはいないに等しいですね。そうすると皆さん、白紙の状態で来られたと思わないと仕方がないので、ネタバレらしせざるを得ない部分もありますが、ご容赦ください。

ミステリーの話に入る前に、昨日の産経新聞の社会面に面白い記事が載っていました。「アニメの聖地に外国人を呼び込め」というタイトルで、アベノミクスの三つの矢のうちの三本目の矢の成長戦略の中に「クールジャパンを海外に売り込む」という作戦があるわけです。日本が誇るサブカル文化、アニメや漫画や小説や映画をどんどん海外へ売り込むという成長戦略を具体化するのに、観光庁と経産省とジェトロが共同で作った政策によりますと、アニメの聖地巡礼の場所は全国にいろいろある中に、西宮市も『涼宮ハルヒの憂鬱』シリーズが含まれております。「西宮市涼宮ハルヒシリーズ」とあがっておりますので、西宮市のほうでもアクションを起こしてくれたらいいなと思います。

西宮市というのは、『涼宮ハルヒの憂鬱』はもちろんですけど、村上春樹ゆかりの地と

いうのも大きなポイントです。村上春樹が育った街であり、作品の舞台にも描かれたり、エッセイに書かれたりもしています。その他にも西宮市ゆかりの文学作品というのは本当にたくさんありまして西宮文学案内でも取り上げていますが、案外知られていないであろう、ミステリーの作者ゆかりの地でもあり作品にも描かれた場所であるということを今日は紹介したいと思います。

清涼院流水さんは人気のミステリー作家ですが、どちらかというと若い読者層や海外の読者層が非常に多いようです。主に2000年代、過去10年間ぐらいずっとミステリーの「ノベルズ」というサイズの分厚い本が次々と出ていまして、皆さん読んで嵌まっていたというのが続いています。最近、大作を出さなくなったので話題が下火になっているかもしれません。

清涼院さんはミステリーを書くようになったきっかけとして阪神淡路大震災の体験が大きかったということです。震災時は、京都大学の学生でした。西宮市の実家は潰れましたが、家族は無事でした。ご本人は下宿暮らしで、京都も揺れて、ベッドの上の本棚が倒れ、本人は書き物をしていたので助かった、寝ていたら死んでいたと語っています。清涼院流水さんの作品と阪神淡路大震災の体験が密接に結びついてミステリーが生まれてきたという流れが一つあります。

貴志祐介さんは、ジャンルが幅広く、一口にミステリーと言いましても、ホラーミステリーでデビューされたんです。最初は怖いお話でデビューされて、その後、本格ミステリー的なトリックを駆使した小説をいくつか出し、その後一転してSF小説で賞を取ってと、幅を広げています。平成22年度には『悪の教典』というバイオレンスホラー小説的なものを発表して直木賞候補になっています。直木賞候補の有力な作家の一人で、ぜひ取っていただきたいなと思います。『悪の教典』は非常にヒットしただけでなく、映画化されて、それがものすごく話題になりました。主人役のハンサムな高校の先生がシリアルキラーであったという話で、伊藤英明さんが『海猿』の時とは一転して、ハンサムで爽やかで女子生徒に絶大な人気のある先生が実は殺人鬼であったという、非常に面白い役を怪演しています。

貴志祐介さんのデビュー作で映画化もされた『十三番目の人格(ペルソナ)—ISOLA』というホラー小説は阪神淡路大震災の西宮を舞台に描かれています。ほとんど全編、西宮が舞台というような小説で、西宮が舞台の小説としては落とすことが出来ないのではないかと思います。西宮市民の方であれば随所に「これはあそこや」とあちこち出て来てニヤニヤしてしまうのではないのでしょうか。

私はもともと村上春樹のあれこれで本を何冊も出していまして、ミステリーの解説本も出そうかなと思ったこともあるんですけど、さっきも言いましたようにネタばらしをしないで解説するというのは至難の業です。

電子書籍のほうでミステリー小説はいくつか発表しています。何か過去に嫌な思いをした奴の顔を思い浮かべ、どうやって殺してやろうかとトリックを考えるのが楽しくて、

やはりミステリー作家は一度やったらやめられないのではないのかなと思いつつ、自分も楽しんでるわけです。そんなわけで講座の結末は誰にも話さないでください。

さて、西宮在住の二人の作家、貴志祐介さんと清涼院流水さんが偶然同じところを作品に描いております。今回の謎はそこです。今まさに旬のミステリー作家が共に西宮で作品の舞台として描いたのはどこでしょう—というのを謎にしておきます。いろいろ想像していただくと、西宮市内の有名な場所でミステリーの舞台に選ばれそうところって結構あるんじゃないかと思うんですよ。一番わかりやすいのは『甲子園殺人事件』とか…タイガースが惨敗したときにスタンドに死体が…とか甲子園球場を舞台にしたミステリーというのが、ありそうで、なかなかない。阪神がそんなのやめてくれとクレームを入れるのかもしれないけど…。あるいは西宮のヨットハーバーも殺人事件の舞台に相応しそうな感じですよ。高級ヨットを舞台にしたものを創れそうですし、あるいは西宮酒蔵殺人事件…これも商品イメージに傷がつきそうとクレームが来そうなので書けないのかもしれませんが、酒蔵の中で何故か死体が…あるいは西宮スイーツ殺人事件。ケーキ屋さんを舞台にケーキを食べたら…これも無理かもしれませんが。とにかく殺人事件の舞台にちょうどよさそうな華麗な舞台がいっぱいあります。

貴志祐介さんも清涼院流水さんもどこを舞台にしているか考えながら見ていただければと思います。まず最初にヒントその一としまして、清涼院流水さんのデビュー作でもある、ヒットシリーズの『コズミック』という小説があります。1996年の発表という年代に気を留めておいてもらいたのですが、清涼院流水さんは阪神淡路大震災の被災体験を持っています。当時20歳の学生でした。京都大学のミステリー研究会出身で、在学中からミステリー小説を書き始めています。95年の阪神淡路大震災体験を経て、非常に長いミステリー作品で賞に応募するのですが、それが最終的に『コズミック』という小説になってデビューしました。

これはとんでもない小説で、面白いんですよ。1994年元旦から始まり、1200個の密室で1200人が殺されるという前代未聞の事件です。とんでもないイメージで…アイディアというか。ミステリーで密室殺人というのは密室物といって一つのジャンルとしてありますけれど、密室で殺人が起こり探偵が四苦八苦して事件を解決するので1冊ですよ。一個一個の事件をどうやって解決していくのか考えるだけでもなかなか大変です。ところが1200個も密室があつて1200人も被害者が死ぬ。その最初のアイディアだけでも凄い。そういうのを本気で書こうというミステリー作家は少ないと思うんです。『コズミック』は捻破りのやり方をしていますが、そういう手もあるかという面白い展開になっています。ミステリー小説いろいろありますが、1200人も死ぬという、こんなに大量に1000人以上も被害者が死ぬという小説はおそらくそれまでのミステリー小説にはなかった。これは明らかに、作者も言っていますように、大震災の膨大な被害の体験の見聞から、大量に人が死ぬのを描こうと思いついたんだろうと。実際にはそれを小説でやるのは大変ですけども、これが最初の作品でした。

最初に確認するのを忘れてましたが、血が苦手だという方、血が流れる話だけで頭がふらふらする方がいらっしゃったら、これからだんだん血みどろになっていくんで、気分が悪くなったら休憩していただいてー

もともとのタイトルは『1200年密室伝説』で第2回メフィスト賞を受賞し、『コズミック 世紀末探偵神話』というタイトルに変えてデビューします。主要作品のJDCシリーズがたくさん出して、これが一番メインのシリーズだと思っただけなんですけど、JDCとは何の略かというと、Japan Detectives Clubという、探偵ばかり集まった架空の組織を活躍させるシリーズです。『コズミック』の中でいろんなものが登場してきますが、次から次へと人が死ぬ1200件の事件を一人の探偵が解決するのは大変ですので、探偵のグループが各自解決していくというグループ戦に持ち込むことを考えたわけです。

阪神淡路大震災と地下鉄サリン事件が起こった1995年という年が、ヒントの2つ目になります。貴志祐介さんにとっても記念すべきデビュー作は阪神淡路大震災を背景にして描いた作品でした。二人にとってのきっかけの年だったわけです。地下鉄サリン事件というのは、ご存じのように、実際に大都市で毒ガステロをやってしまった、大量殺人を実行してしまった事件です。阪神淡路大震災の場合の死者の多さとは比較になりませんが、自然の災害で人命が失われるというのとはまったく違う大量殺人によってたくさんの人命が失われた、非常に衝撃的な出来事でした。こういう事件をきっかけにミステリー小説の世界も作品が変わっていくわけです。

ヒント3は、先ほどの阪神淡路大震災と地下鉄サリン事件に並ぶような、社会に衝撃を与えた殺人事件が97年にありました。酒鬼薔薇聖斗事件。衝撃的な報道が連日あり、この事件のときは、不謹慎ではありますが、一億みんな探偵になったような感じで、あれこれ推理を働かせていたような雰囲気でした。この事件の後、日本のミステリー作品の作風が随分変わっていったように思います。欧米ではシリアルキラーですとかサイコキラーと異常な犯罪が小説に描かれていましたが、日本でも実際にこういう事件が起こったあとでは、そういう異常な殺人を扱ったミステリーがどんどん増えていったように見えます。

そのようなことがいっぱいありまして、貴志祐介さんは96年に『十三番目の人格 ISOLA』という第3回日本ホラー小説大賞佳作(原題は「ISOLA」)でデビューします。95・96・97年あたりはホラー小説的な大量殺人的なものが社会にも起こり、小説の世界でもそういう作品が次々と出された年であったわけです。映画『ISOLA 多重人格少女』には西宮の出る場面もありました。『ISOLA』は映画としては面白くなかったんですが、場面が西宮っぽくなっていたので面白かったですね。震災ボランティアに来る主人公の女性を、木村佳乃さんがやっています、その場にいる人の感情の動きを聞き取るような、テレパシーに近い、エンパスという特殊な能力を持った女性です。彼女は謎の少女に震災ボランティアの中で事件に出会うんです。バスで西宮の山手にいる心理学の先生に主人公が会いに行くシーンです。阪神バスをイメージした六甲バスと書いてあり、西宮日報という新聞

を読んでいるシーンもあります。ところどころ道であったりバス停であったり西宮市内でロケしたところもあるようですが、オール西宮ロケとはいかなかったみたいで、主要な場面で高校と大学が出てくるのは関東のほうでロケをしたようです。大きな避難所になっているスポーツセンターも出てきますが、それもどうやら西宮でロケしたのではなさそうです。最初に阪神淡路大震災の報道のフィルムから始まり、一番最後に神戸の場面が出てきて、阪神淡路大震災の関連の映画になっています。映画そのものとしては特にお勧めはしません。

原作の『十三番目の人格 ISOLA』に出てくる描写が面白いので、ご興味のある方は読んでみてください。多重人格の高校生の女の子が通う高校が私立学校なんですが、

(以下、引用部分)

「兵庫県の尼崎市と西宮市の間を割って大阪湾に注ぐ武庫川べりにあった。正面のグリルは黒塗りの鋳鉄で、大学と見まがうような銀杏並木が続いている。建物はすべて、美しい焦げ茶色の化粧煉瓦でできており、いかにも有名進学校らしい重厚なイメージを作り出すことに成功していた。ざっと見渡した限りでは、大震災による被害も、ほとんどなかったようだった。」

(以上、引用：貴志祐介『十三番目の人格(ペルソナ)—ISOLA』(角川ホラー文庫) p.55)

というような描写があります。武庫川の川べりにある高校で、化粧煉瓦で出来ている美しい校舎で、阪神電車の甲子園からバスに乗って行く。これを地図を見て探せば、今の武庫川女子大の校舎の旧甲子園ホテルですね。旧甲子園ホテルが私立高校として借用されて描かれています。今、現に女子大の校舎として使われていますので、私立のお嬢さん学校として設定してもおかしくない。そんなことは西宮在住の人しか思いつかない。いかにも作者が西宮市民だとよく分かる場面ではないかなと思います。貴志祐介さん自身は大阪の出身で、今は西宮在住の直木賞候補の作家です。

一方、原作では西宮大学という、ありそうでない大学が登場します。西宮にはたくさん大学がありますが、原作を読みますと

(以下、引用部分)

「タウンページを繰ると、私立西宮大学は鷲林寺町というところにあった。地図で確かめると、市街地からはずっと北の、西宮市のシンボルである六甲山の西側に位置している。西宮市は、神戸市と同じように六甲山地の北側まで続いており、ここでもまだ、市の南部になるらしい。ちなみに、西宮大学から三キロほど東に行くと、関西学院大学がある。電車とバスを乗り継いで行く手もあったが、由香里は甲子園の駅前でタクシーを拾った。」

(以上、引用：貴志祐介『十三番目の人格(ペルソナ)—ISOLA』(角川ホラー文庫) p.221)

と細かい描写があります。私立西宮大学を鷲林寺のところに設定した時点で西宮市民らしいなという感じがします。実際には近くに学校はたくさんありますが、小説に描かれた場所に大学はありません。貴志祐介さんのデビュー作『十三番目の人格 ISOLA』は、西宮市内のいろんなところを使って、阪神淡路大震災直後の被災地を舞台に、どちらかという怖いホラー系のミステリーが展開されます。多重人格の少女が事件を起こしているらしいと、心理学者と超能力をもった主人公が事件を追っていく。多重人格が流行りだした頃の作品です。『十三番目の人格 ISOLA』は第3回ホラー小説大賞の佳作で、西宮市民にはぜひ読んでほしいなと思います。二作目の『黒い家』が第4回日本ホラー小説大賞を受賞して映画化されたので、ご覧になった方がいるかもしれません。その後、多才な活躍をされて、『青の炎』『硝子のハンマー』『新世界より』と次々とヒット作を出しています。去年、テレビドラマで密室物の推理ドラマをやっていましたが、推理物のドラマとしては凝っていて面白かった。『新世界より』というのは未来物のSF小説ですが、アニメ化されたものが昨年放映されていました。日本が1000年ほど後にまったく違う文明の世界になっているという小説です。

この講座の最初の謎は、西宮在住の貴志祐介さんと清流院流水さんがミステリーの舞台として選んだ西宮の場所はどこでしょう、というものでした。いろんな候補を思いつくでしょうが、二人が共通して選んだ場所は？

実は、ここまでの話で、ほぼヒントは出ているんです。もしこれがエラリー・クイーンの小説であれば、このへんでそろそろ読者諸君への挑戦状が出る頃です。材料は一応全部出しましたので、西宮市内に詳しい方ならこれでおわかりになるはずです。

第5ヒントとして、『バトル・ロワイアル』という、のちに映画化された小説があります。98年の第5回日本ホラー小説大賞の最終候補まで残り、非常に物議を醸して喧々諤々ののちに受賞を見送られた作品です。あまりにも社会的に不道德すぎてショックが大きいだろうということで受賞を見送られた、曰くつきの小説です。そんなことを言われると余計に読みたくなるのが読者の性ですから、受賞を見送ったのはひょっとしたら売るための作戦ではないかと思ったりもしますが、最終的には太田出版が単行本にして出しました。帯にありますように、中学生42人皆殺しゲームという、中学生同士殺し合いをさせて最後に1人生き残るといふ、物議を醸す内容の小説です。映画になったのも非常にショッキングな場面が多いので物議を醸しました。映画『バトル・ロワイアル』はパート1パート2の2作ありまして、いま活躍している俳優さんたちが中学生役で出て人気が出ました。柴咲コウ・前田愛・亜季の姉妹、藤原竜也、安藤政信…今いろんなところで活躍している旬の男優女優たちが、この映画の中学生役で注目を浴びていました。先生役でビートたけしが怪演しているのも印象的でしたね。映画の内容は血みどろなので、お勧めはしません。

そんなふうで、98年に『バトル・ロワイアル』の小説が出て、映画も出てきて、それに前後するように悲惨な事件が起こってくるんです。

附属池田小事件は僕の近くの場所で起こったので、リアルタイムに経験した出来事でした。

た。2001年6月8日当時、勤めていた高校で体育祭をやっていました。6月だと暑いので、生徒が気分が悪くなって倒れたりします。この時も何人か生徒が気分が悪くなり救急車を呼んだのですが、何か事件があったらしく救急車が出払っていて来ないので、タクシーで病院へ行ってくれと言われたという話が伝わってきて、タクシーで病院に行っても病院が大騒ぎだったんです。豊中・池田…北摂近辺の救急車は全部出払っていました。最後の最後まで後味の悪い事件でした。

このへんでヒントをまとめていきたいと思います。これまで説明したのは、だいたい1995年から2001年の池田小事件に到るまで大量殺人という事件が次から次へと起こり、災害は起こり、小説や映画でも大量殺人物が次々つくられた時期だったわけです。同じ頃に貴志祐介さんは『十三番目の人格 ISORA』で阪神淡路大震災を舞台にして西宮での事件を描き、清流院流水さんは『コズミック 世紀末探偵神話』という小説で1200人が次々と密室殺人で殺されるという奇想天外な大量殺人小説を書きました。

大量殺人の作品というのは不道德なので、作品にしても映画にしてもクレームがつくわけです。去年ヒットした『悪の教典』も、学校での生徒の大量殺人物ですね。『バトル・ロワイアル』の話を彷彿とさせるような、学校を舞台にした大量殺人物です。映画は伊藤英明さんが、にこやかなハンサムガイで女子生徒に人気のある殺人鬼であったという演技を披露しています。これも血みどろなんで、苦手な方は絶対に見ないほうがいいですけど、大変な話題になりました。

両者の共通項がいっぱいあるんだなと今までの話でわかれたと思いますけど、貴志祐介さんと清流院流水さんは年がだいぶ違いますし、同じ西宮在住といっても生い立ちがだいぶ違うんですけど、どちらも阪神淡路大震災をきっかけにデビューして大量殺人物の作品で人気を博したという不思議な共通点があります。アナグラムという文字を入れ替えてヒントを解き明かす作品作りでも共通するところがあり、ミステリーのジャンルである密室物という共通点もあります。

『十三番目の人格 ISORA』はお読みになった方がいるかもしれませんが、清流院流水さんの作品を読まれた方がほとんどいない。『秘密屋文庫 知ってる怪』というちょっとふざけたネーミングの小説がありますが、これもおそらく読んでらっしゃらないということになるので、最初の話に戻りまして、貴志祐介さんと清流院流水さんのミステリーで共通する西宮の場所はどこでしょう。ヒントになったのは、さきほどの『ISOLA 多重人格少女』の映画に出てくる西宮大学の場所は、原作によるとバスで鷺林寺のほうへ上がっていくというのがヒントで、『秘密屋文庫 知ってる怪』は都市伝説を追っていく陰謀に巻き込まれていくという謎解きの話です。西宮市内で有名な都市伝説といえば…というあたりがヒントになってくるわけです。皆さんミステリーが好きな方ばかりなので、謎解きには自信がおありかもしれないので、おわかりになった方は聞いてみようかと思います。

西宮市内で都市伝説として有名な場所。どっちかっていうと山手のほうですね。どなたか、おわかりの方？

受講生 夫婦岩。

土居 当たりです。場所は、『ISORA』の中に出てくる、鷲林寺のほうにあるという西宮大学へ行く、その道筋にあります。西宮では有名な怪奇スポットだということが知られていまして、清流院流水さんの作品の中では、都市伝説の話として夫婦岩の話や牛女の話が紹介されていますが、主人公に流Pという変な仇名がついているんですが、

(以下、引用部分)

「ぼく流Pが生まれた場所で、高校まで育った場所でもある兵庫県西宮市には、「牛女」のメッカとされている甲山がある。異形のモノを郷愁（ノスタルジア）と結びつけるのはヘンかもしれないが、「牛女」と聞いただけで、ぼくが奇妙ななつかしさを感じてしまうのは事実だ。甲山は、その名の通り、カブトのように綺麗な丸い稜線を描く山である。小学校の校舎などから遠目に見るとカワイらしいのだが、地元屈指の霊的スポットとして知られている。小学校から甲山までは歩いて行ける距離なので、子供の頃は遠足で何度も訪れた。甲山の吊り橋で後ろを振り向くと、「牛女」が現われて殺される。そういった話には、幼い頃から馴染みがある。」

(以上、引用：清流院流水『秘密屋文庫 知ってる怪』p.113)

ということですが、皆さん、西宮在住の方であれば実際に耳にされたことあるんでしょうか。甲山の吊り橋で振り返ると牛女に殺されるそうですよ。世代によって伝わっている伝説のバージョンが違うのかもしれませんが、清流院流水さんと同じ年頃くらいの西宮の子供達は甲山の牛女のことを聞いていたんだそうです。

『十三番目の人格 ISORA』にも、先ほど読んだところの続きですけど、夫婦岩が登場しますので、ちょっと読みます。私立西宮大学にタクシーで向かうところです。

(以下、引用部分)

「タクシーは、夙川まで西に進み、それから県道大沢-西宮線を北上していった。やたらにたくさんトラックが行き来している。急勾配の坂を上がって高台に着くと、県道を真っ二つに割る形で、木や草がおい茂った小山のようなものがあるのが目についた。その前には、『左へ』という黄色い標識と、『スピード落とせ』という小さな立て看板が立てられている。まるで、中央分離帯が癌化して、異様に膨れ上がったというような感じの代物だった。

(中略)

由香里が「あれ、古墳か何かですか？」とたずねると、小太りで赤ら顔のタクシーの運

転手は「あれは、夫婦岩ですわ」と答えた。」

(以上、引用：貴志祐介『十三番目の人格(ペルソナ)—ISOLA』(角川ホラー文庫) p.221)

というように、この後タクシーの運転手があれこれ因縁を語ってくれるわけですが、写真で出していますのは、鷲林寺のほうへ向かう途中のバス停です。

『十三番目の人格 ISORA』の中で描写される校舎のイメージは非常にモダンな近代的な校舎です。おそらく貴志祐介さんのイメージとしては、私立西宮大学というのは、場所は鷲林寺のほうにして、校舎は夙川短大の校舎をそのまま使っているみたいな感じで出てきます。夙川短大は財テクの失敗で土地を売り払いポートアイランドに行ってしまったので、山の上の短大はもうないそうです。夙川学院短大のバス停も名前が変わったようで、この風景はもう見られないわけです。

校舎の屋上でバトルを繰り広げる場面があり、「校舎の屋上から見ると六甲山が遮らないので、大阪湾がすべて見えて」と、まるで見てきたような描写がなされています。夙川短大の屋上の上でロケ出来ればよかったのになと思うんですけど、これが『十三番目の人格 ISORA』に出てくる私立西宮大学のモデルであろうと思います。

その後、タクシーでずっと登っていきますと、鷲林寺のほうへ向かう途中に夫婦岩がある。さらに近づくと黄色い矢印があって、小説の中にそのまま描写されているのが楽しいですね。知らない人が見たら古墳かなと思います。清流院流水さんも西宮の有名な都市伝説として牛女の話を取りあげているわけですが、牛女の伝説は夫婦岩に因む話もあるんだそうです。この夫婦岩の話は詳しく知らなかったので調べましたら、神呪寺の資料に紋左衛門岩というゆかりで載っていました。六甲山の天狗という民話的な話があり、水争いで中村紋左衛門という人が天狗に化けてそれを沈めたということです。夫婦岩のところに天狗となって現れ、「神の怒りじゃ」というわけで水争いが収まったのを記念して、明治28年に広田神社に石碑を立てたそうです。夫婦岩のもともとの由来は神呪寺のほうで伝えられているようですね。

夫婦岩をめぐる怪奇なお話はいろいろ出てきまして、水害で県道拡張工事をしようとするたびにトラブルが起こるそうです。県道を広げるために夫婦岩を爆破しようとするたびに、爆破しようとした人が死んでしまった。祟りだという話になって、しばらく工事は流れてしまいました。そんな祟りなんかあるかと「わしがやった」という人がまた死んでしまった。祟りに立ち向かうのはやめておいたほうがいいですね。

西宮の有名な心霊スポットとしての夫婦岩には、狐の祟りだとか白蛇の祟りだとかいろんな都市伝説がついているようで、蛇は岩につきものですが。牛女も夫婦岩とセットになっています。

これは清流院流水さんの甲山とは違うバージョンで、夜中の0時0分、ちょうどに夫婦岩に行くと、牛女が見られるんだそうです。興味のある方は行ってみてください。牛女伝説というのは西宮近辺にあちこち伝わっているようです。

夫婦岩ゆかりの神呪寺の創建は淳和天皇の頃、甲山は弘法大師ゆかりの霊山で神呪寺は828年に出来たということになっています。

『十三番目の人格 ISORA』で私立西宮大学がある鷲林寺も、833年に弘法大師空海が開きました。夫婦岩・牛女の話も、甲山という霊場の持っている心霊パワーがいろんな形で姿を現しているのかもしれませんが。

『十三番目の人格 ISORA』をホラー小説として書くときに相応しい舞台が地元の心霊スポットとして、要るわけです。多重人格の少女は幽霊的な存在ではなさそうですが。異形の怪物的なものが人間と最後に対決する場所として、西宮市でロケを考えるとすれば甲山へ行かなきゃなと貴志祐介さんは思ったんでしょう。甲山であれば心霊的なものが活躍しても不思議はなさそうだし、いかにもホラー物に相応しい舞台として選んだのではないのでしょうか。ホラーミステリーの場面としては、海側のモダンな場所より、霊場のある山手のスポットのほうが怖さもいっそう増すだろうし、相乗効果がありますよね。

ミステリー小説の場所として二人の売れっ子のミステリー作家が選んだのは甲山であったということです。言われてみればそうかなという気がするんじゃないですかね。西宮の方であれば、ホラーミステリーの舞台として甲山が登場する・・・ありがちなと思われるかもしれませんがね。他府県の読者にしてみれば、西宮で怖い場所は甲山なんだというのは新鮮な発見だったのではないのでしょうか。甲山のイメージは他府県の者からするとハイキングスポットですので、心霊スポットとしての甲山の存在はそれほどみんな知っているわけではないと思うんです。関西でもそうですから他の県の人からすれば、甲山が西宮にあるのがこれを読んで初めて分かるでしょうし、心霊スポットがあるならぜひ行ってみよう・・・心霊スポットが大好きな人いますからね。

『十三番目の人格 ISORA』を読んで私立西宮大学を探しに行つて一西宮大学どころか夙川学院短大もなくなってしまつて「どこにあるんや？」となるかもしれませんが、心霊スポットの夫婦岩を見たら納得して帰られるかもしれません。清涼院流水さんの読者の方は甲山の吊り橋にチャレンジするかもしれません。ふり返つたら牛女見れるかなと甲山心霊探検に出かけるかもしれません。

甲山というのは西宮の市内のどこからでも綺麗に見れるわけですけど、この写真は村上春樹で有名な蘆原橋のところから撮っています。甲山から真つすぐ夙川が海へ流れ込んできますので、ちょうど図書館のある流域は甲山と海が真つ直ぐ繋がる川筋に町が広がっているという、よそから見るとなかなかないロケーションは、小説に描かれるに値する風景だと思います。

村上春樹の話にも出てきますけど、甲山には霊的なスポットのイメージが強いようです。『海辺のカフカ』に、甲山をイメージした山を登場させて、そこでも異常な事件が起こる。遠足に行った子供たちが突然バタバタと倒れ・・・一種の超常現象の事件が起こる場所として甲山らしき山を村上春樹も描いているというあたりが、甲山の持つ心霊パワーだなという感じがします。

夫婦岩か甲山だろかなと思ってた人、どのくらい、いますか？皆さん、そう思ってたんですね。他に西宮で有名な心霊スポットはあるんですか？

受講生 越木岩神社。

土居 やっぱり山手ですね。海のほうってないんですかね。次回は西宮の怪談を集め、蝋燭を灯して話してもいいんですが・・・

受講生 涼宮ハルヒの聖地めぐりですか、現実には歩いていて、ここが聖地なんだという案内もないように思うんです。

土居 ないですね。

受講生 政府のほうでされるということなんですけど、先生のほうから見られまして我々がどういう風に関わって行けばいいか…町を歩いていても、涼宮ハルヒの聖地というのは、読んだ人でないと分からないと思うんです。

土居 西宮市内でなんとなくオタッキーな感じの人がぞろぞろと歩いていたりすると、アニメ関係の人かなと雰囲気的にわかるんじゃないかと思いますが、その人たちは何を見て来るかという、作品の中に西宮北口駅の公園の背景がアニメに描かれていて、それを見て訪ねてくるんです。政府のアクションがどうするかまだ分からないんですが、西宮市民のほうでアニメの聖地というのが反対でなければ、兄ちゃんたちがカメラかけてぞろぞろ歩いているのを暖かく見守ってあげることからスタートすればいいのではないかなと思います。いかにもオタッキーな兄ちゃんたちが歩いていて、不審者のように見られたりすると彼らも辛いですね。これはアニメの聖地で来てるんやなと暖かく見守ってあげれば来やすい、さしあたりそれでいいと思います。ハルヒの場面が出てくる場所の看板を出すとかするなら、自治会・商店街単位ではないかと思いますね。だいたい各地のアニメ関係の場所の動きというのは自治会・商店街から始まるみたいなので、アクションがあればファンの方も喜ぶと思います。

受講生 このあたりにも心霊スポットがという話がありましたが、ここが伝染病病院だったということで、ここの地下の書庫で1人で作業をしていると書庫の奥のほうに女の子がいて何かしているという話が、ちらほらあつたりします。

土居 この図書館の地下ですか？この図書館の敷地が伝染病病院だったわけですか。

受講生 関係があるのかどうかはわかりません。ただ職員の中でそんな話があったことがあります。

土居 もとの中央図書館のときには、そういうのは出なかったんですか？

受講生 それは聞いたことはないですね。あそこはお墓ですね。

土居 市役所は出ます？

職員 あまり…

土居 そうですね。この場所が出るのであれば、伝染病病院だった頃の心残りがあったのかもしれない。病院ですとかお墓ですとか典型的な心霊スポットがありますよね。今後、西宮文学案内でも怪談特集を組んだらいいかもしれません（笑）